

前期：キリスト教思想と宗教哲学

オリエンテーション——宗教哲学とその基本問題

1. 宗教哲学の歴史と伝統 2. 理性と啓示 3. 悪と神義論 (4. 予定と自由意志)
5. 形而上学と神
6. シュライアマハー 7. トレルチ 8. 波多野精一 9. ブーバー
10. ティリッヒ
11. リクール 6/26
12. 研究発表1 (山田、田中) 7/3
13. 研究発表2 (岡田、長原) 7/10
14. 研究発表3 (張、谷塚) 7/17
15. 研究発表4 (齋藤) 7/24

<前回>ブーバー (1878-1965)**(1) 対話の哲学****『我と汝・対話』(岩波文庫)**

1. 根源語から人間存在へ、言葉・言語から存在へ
 - 二つの対応語 (Ich-Du、Ich-Es)、二つの存在・世界
 - 出会い、関係から自己へ、相互性
 - 間、愛、責任、選び、恵み
2. 個と共同性、関係の中心、三項関係
3. <それ>の意味、二つの存在ではなく両極性 (両極的存在)
 - 波多野の言う文化的生、ティリッヒにおける「個別性—参与」の両極性、H.R.ニーバー
4. 永遠の〈なんじ〉、神、神秘、すべての関係が交差するところ。
 - 決して「〈それ〉とならない汝」の意義。

↓

- ・特定の宗教的伝統に限定された思想ではなく、「哲学」として。
- ・水垣渉「《言葉》の始源」

基礎語 (Grundwort) : Ich-Du、Ich-Es

始源語 (Urwort) : Ich-wirkend-Du、Du-wirkend-Ich

〈なんじに働きかけつつあるわれ〉、〈われに働きかけつつあるなんじ〉

↓

出来事・生成／関係・存在

出会い 間・相互性

選び・愛

言葉・語り

(2) ユダヤ思想家

5. ヘブライ的人文主義
 - ・人文主義 (ヒューマニズム) の普遍性と「ヘブライ的」の特殊性との関係。
 - ・『ユダヤ人とそのユダヤ主義』(Der Jude und sein Judentum, 1963.)
 - ヘブライ的聖書 (古代の宗教的伝統) → 聖書的人間像の価値 → 時間的に制約されたもの

と超時間的なものとの区別→獲得された人間像のもつ現在のな生に対する規準。

・『我と汝』の対話の哲学のもつユダヤ的基盤（?）

ハシディズム的背景：「神の火花」

6. ドイツ語訳聖書：エクリチュール／パロール

ルター訳聖書に対して。 ドイツ語を話すユダヤ人のために。

書き言葉としての聖書テキスト。

↓

音声、リズムへの注目。

7. 信仰の二類型：ユダヤ教とキリスト教

エムーナ(民族的)とピステイス(パウロ、個人的)の区別

↓

ユダヤ教にとってのキリスト教の意義

(3) 実践家ブーバー

8. 教育者：ヘブライ的人文主義→民族教育、教養

ドイツ語訳聖書の意義

9. 社会実践家

・宗教社会主義：アナキズム的→イスラエルの「キブツ」

中央集権的国家ではなく、協同組合のネットワーク
による新しい社会の実験。

・シオニズム：文化的シオニズム、根源的にユダヤ人全体の精神的ルネサンスを地盤とする文化運動としてのシオニズム。

cf. ヘルツルの政治的シオニズム：政治的な意味におけるユダヤ人の国家再建

・アラブとユダヤの共存：一つの土地に生きる二つの民族（二民族国家論）

一つの土地を共に耕す、「ユダヤ人とアラブ人の共同経済」

10. ティリッヒ

(1) ティリッヒ思想とその射程

1. ティリッヒ(1886-1965)

神学と哲学の境界（神学者・哲学者）、宗教社会主義、文化の神学、宗教史の神学

ドイツからアメリカへ → 現代キリスト教思想は理論と実践の両面で変革を必要としている。

ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) : ドイツ生まれのプロテスタント神学者、宗教哲学者。ベルリン、チュービンゲン、フランクフルトなどの諸大学で教え、宗教社会主義の理論家として活躍。33年にヒトラー政権によって教授職から追放され、アメリカ亡命後はユニオン神学校、ハーヴァード、シカゴの諸大学で活躍。アメリカの神学と宗教哲学に大きな影響を与えた。ティリッヒ思想の特徴は、自伝「境界において」の表題にあるように、宗教と文化、神学と哲学、観念論とマルクス主義など、緊張関係にある二つの領域の境界で思索を展開している点に認められる。アメリカ時代の代表作『組織神学』（全三巻 新教出版社）では、人間存在の中に構造的に組み込まれた諸問題が宗教的問いとして哲学的に取り出され（哲学的な神学）、その問いに対してキリスト教のメッセージがいかに答え

るかが体系的に示された。この組織神学の方法論が「相関の方法」である。ティリッヒの影響は神学や宗教哲学を超えて宗教学全般に及んでおり、究極的関心という信仰概念や、信仰の具体的表現形態を扱うシンボル論はとくに重要である。晩年は、日本の宗教者との交流などを通じて宗教史の神学を構想するに至るが、未完に終わった。(『岩波キリスト教辞典』)

2. 思想の発展史：初期（第一次世界大戦）／前期（1919-1933）：意味の形而上学
／中期（1933-第二次世界大戦）／後期（1946-1960）：存在論
／晩年（1960-1963）
3. 一貫性と変化（思想の諸レベルにおける議論）：弁証神学・宗教哲学、象徴論
前期：文化の神学、宗教社会主義論
後期：組織神学、宗教心理学・精神分析

(4) 前期ティリッヒの宗教哲学

4. 19 世紀から 20 世紀の哲学の展開＋弁証法神学

5. 西谷啓治「宗教哲学——研究入門」(1949) (『西谷啓治著作集 第六巻』創文社)

「ティリッヒ」：179-180 頁。

- ・ 1925 年の宗教哲学、1926 年の「カイロスとロゴス」、1930 年の『宗教的現実化』
- ・ 無制約的なもの、Grund und Abgrund、神律、逆説の宗教、metalogisch、後期シエリング、デモーニッシュなもの、カイロス

6. Religionsphilosophie(1925), in: MW.4

Einleitung: Gegenstand und Methode der Religionsphilosophie

1. Religion und Religionsphilosophie
2. Die Stellung der Religionsphilosophie im System der Wissenschaften
3. Die Methode der Religionsphilosophie

Erster Teil: Das Wesen der Religion

I. Die Ableitung des Wesensbegriffs der Religion

1. Die Sinnelemente und ihre Relationen
2. Die allgemeine Wesensbestimmung der Religion
3. Der Aufbau der Sinnfunktionen
4. Das Religiöse in den einzelnen Sinnfunktionen
5. Wesen und Wahrheit der Religion

II. Die Wesenselemente der Religions und ihre Relationen

1. Religion und Kultur
2. Glaube und Unglaube
3. Gott und Welt
4. Das Heilige und das Profane
5. Das Göttliche und das Dämonische

III. Geistesgeschichte und Normbegriff der Religion

1. Die religiösen Grundrichtungen
2. Die Religionsgeschichte und der normative Religionsbegriff

3. Die religiösen Richtungen in der autonomen Kultur

Zweiter Teil: Die Kategorien der Religions

I. Die religiösen Kategorien der theoretischen Sphäre

1. Der Mythos

2. Die Offenbarung

II. Die religiösen Kategorien der praktischen Sphäre

1. Der Kultus

2. Die Kultgemeinde

Literatur

7. Kairos und Logos: Eine Untersuchung zur Metaphysik der Erkenntnis (1926), in: MW.1

0) 問題：歴史主義を克服する真理の動的的理解

1) 西洋思想史の二つの流れ：

主流（方法論的流れ、合理的学の理念・形式主義）と傍流（神秘主義、生の哲学）
直観的記述的、反省的説明的

2) 真理は超時間的・超歴史的。抽象的な真理概念 → カイロスへのアスケーゼ 永遠の真理

3) 認識の歴史性・決断→存在の歴史性・決断

（実在論：認識の合理性は対象の側から規定される。）

歴史主義的な相対主義への回答は、真理自体の歴史性において可能になる。

「ロゴスは時間のなかにはいつてきて、その内的無限性を啓示するのである。」

ロゴスはカイロスのである。

Der Logos wird Fleisch; er geht ein in die Zeit und offenbart seine innere Unendlichkeit.

(290)

So dient der Kairos nicht der Verhüllung, sondern der Offenbarung des Logos. (296)

4) ヨハネ福音書のロゴス論（受肉）→ドイツ観念論・後期シェリング

→後期ハイデッガーの真理論・存在論

Seinsgeschichte、Geschick

ハイデッガーは聖書的か？

5) 絶対者自体が動的歴史的である。

cf. ・形而上学的な神＝神の不可受苦性

・弱い神、あるいはプロセス神学

弱い神の方が、より高い。

↓

「相関の方法」という語り方

カイロス→状況、ロゴス→メッセージ。

8. 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」（1946）

（上田閑照編『自覚について 他四篇』岩波文庫）

「内在的超越のキリスト」

「私はベルジャーエフの「歴史の意味」に対し大体の傾向において同意を表すものであ

るが、彼の哲学はベーメ的な神秘主義を出ない。新しい時代は、何よりも科学的でなければならない。ティリッヒの『カイロスとロゴス』も。私の認識論に通じるものがあるが、その論理が明でない。これらの新しい傾向は、今や何処までも論理的に基礎付けられなければならない。」(396-397)

「国家と宗教」「浄土真宗的」

(3) ティリッヒ神学の方法と体系

9. ティリッヒ組織神学構想：

「相関の方法」(Method of Correlation)によって構成される体系の横軸 (横構造)
+ 三位一体論的あるいは救済論的な体系の縦軸 (縦構造)

10. 神学の解釈学的構造

1) 「相関の構造」：「問いと答え」の相関＝解釈学的構造、自己同一性と状況適応性

- ・ 問いの定式化 (哲学) ← 状況
- ・ メッセージの答えとしての提示・解釈 (神学)

2) 「個と共同体」の循環：共同体における問答・討論・対話の個人による集約

11. 「問いと答え」の定式化における哲学 (あるいは哲学的要素) の役割

問いと答えは自律性を保ちつつも、相互に依存し合っている (=循環)。

↓

「諸科学、哲学、神学 (答えとしてのメッセージの解釈)」の三者の関連づけが問題となる。

12. 「すべての神学的労作の一つの極である『状況』とは、個人や集団がその中において生きる場所の経験的な心理学的社会的状況を意味しない。その状況とは、彼らが彼らの実存の自己理解をその中で表現する場所の科学的、芸術的、経済的、政治的、倫理的諸形態の総体を意味する」、「神学が考えなければならない『状況』とはそれぞれの時代にさまざまな心理学的社会的諸条件下においてなされる創造的な実存の自己理解である。」(4)

13. 解釈学的中心 (意味付与原理) としての規範：多様な素材を一つの意味連関へとまとめあげ、神学に組織あるいは体系という統合的な形態を与える。神学者の共同体性。

	Question	Answer
Vol.1 Introduction		
Part I	Reason	Revelation
Part II	Being	God
Vol.2 Part III	Existence	Christ
Vol.3 Part IV	Life	Spirit
Part V	History	Kingdom of God

・ Being / Existence / Life • History

・ God / Christ / Spirit : Trinity

Creation / History / Eschaton • Eternity : History of Salvation

< ST1 > Introduction:

- A. The Point of View.
 - 1. Message and Situation
 - 2. Apologetic Theology and the Kerygma
- B. The Nature of Systematic Theology
 - 3. The Theological Circle
 - 4. Two Formal Criteria of Every Theology
 - 5. Theology and Christianity
 - 6. Theology and Philosophy: A Question
 - 7. Theology and Philosophy: An Answer
- C. The Organization of Theology
- D. The Method and Structure of Systematic Theology
 - 8. The Sources of Systematic Theology
 - 9. Experience and Systematic Theology
 - 10. The Norm of Systematic Theology
 - 11. The Rational Character of Systematic Theology
 - 12. The Method of Correlation
 - 13. The Theological System

<参考文献>

- 0. *Tillich · Main Works · Hauptwerke. 1 - 6*, de Gruyter.
Paul Tillich. Gesammelte Werke, Bd.I-XIV, Evangelisches Verlagswerk, 1959-1975.
Ergänzungs- und Nachlaßbände zu den Gesammelten Werken, Bd.I- XVI, de Gruyter,1971-
- 1. ティリッヒ『組織神学』第1、2、3巻、新教出版社。
Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.1, 2, 3* (1951, 1957, 1963),
The University of Chicago Press.
↓
独訳: *Systematische Theologie. Bd.I, II, III*, Evangelisches Verlagswerk.
- 2. 『ティリッヒ著作集』全10巻+別巻3巻、白水社。
- 3. ヴィルヘルム・パウク&マリオン・パウク『パウル・ティリッヒ 1生涯』
ヨルダン社。
- 4. 芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。
『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
「ティリッヒ——21世紀へのメッセージ」、『福音と世界』2000年4月号、
新教出版社、18-23頁。
- 5. 土居真俊『ティリッヒ』日本基督教団出版局、1960年。
- 6. Deutsche Paul-Tillich-Gesellschaft : <http://www.theo.uni-trier.de/tillich/tillich.html>
ティリッヒ研究会 (体会) : <https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/tillich>
ティリッヒ研究文献 (芦名研究室) : <http://tillich.web.fc2.com/sub8b.htm>
ティリッヒ (LogosOffice) : <http://logosoffice.blog90.fc2.com/blog-category-17.html>